

後
久
録
一

建武三丙子以前ヨリ
至

(ママ)
元録五壬申年

凡二百廿七年

後久録一

建武三丙子已前より

(ママ)
元録五壬申年迄

凡二百廿七年也

師輔 九条右大臣

光秀加茂社職中務

助秀豊後本多居本多八郎ト云

藤原氏

大職冠ヨリ二十四代

本多豊後守助定

父助秀豊後国本多江配流助定出生

因茲子々孫々本多豊後守ト名乗申候

家之紋立葵者元來加茂依為社

職也

一 八代之祖本多豊後守廣孝代家之

系図、近衛殿依尋差出候処

叡覽之上被任右兵衛佐、一家再興

可謂、後代名譽之旨奥書ニテ系図

改准后書判有之、天正十一癸未年

十月中旬被下之、今以所持仕候

右之通右兵衛佐被任候得共

権現様 上意ニ豊後守ハ本多之家

嫡子代々相続之名ニ候間、元之俣ニ

豊後守と名乗候得と被

仰付候故、名ハ改不申候

一 建武三年三月廿日從 尊氏將軍

志村以下之凶徒等可相鎮旨、助定江

御教書被下夫ヨリ武家相成申候

領知仕候

御教書之写

右御感状之写

志村以下凶徒等致路次煩、越前伊井

御書判

城山参路事猶狭石関大草伊豆守

本多右馬允助定

手ニ随、催郡内勢被可被鎮狼藉也(符カ)

可令隼領地尾張国横根郷同

依而忠節可恩賞之状如件

栗飯原郷等事

建武三年三月廿日源朝臣御書判

右為勲功賞所宛行也早守先例

本多右馬允殿

可令領掌之状如件

其後依有勲功翌年八月五日尾張国

建武四年八月五日

横根郷・栗飯原郷被下之、秀清迄六代

右之通今以所持仕候

助定ヨリ六代

秀清嫡男

本多豊後守秀清

本多修理大夫清重

長親様御代君臣之御誓約仕三州

長親様 信忠様御二代江秀清、清重

土井郷拝領仕候

御忠功申上候書物一冊上州白井城ニ而

土井郷拝領仕候ハ明応六巳年ト申伝候

焼失仕候、唯今所持不仕候、外唯今

明応七戌年九月十五日秀清病死年

有之分ハ越前守廣孝隠居所ニ差置

七十二

候故残り、今以所持仕候

西證院殿釋心賢居士

永正十三丙子年二月八日清重病死年

三州土井屋鋪杉崎久右衛門同半左衛門与

五十歳

申百姓之地墓有

證受院殿釋淨蓮居士

三州坂崎村円行寺墓有

清重嫡子

本多豊後守信重

初名 彦三郎

信忠様より御一字被下之三州土井城

築、在城仕候

清康様御代享きょう(ママ)録 二巳丑年三州下地

御合戦之時御供仕御味方敗軍之節

返之合防戦仕、其隙ニ

清康様御引取被遊候、信重踏止八月

三日御油繩手ニ而討死仕候、年二十三

家来十六人討死仕候、御油繩手ニ而深手負

其後相果候と有之もあり、是討死成故

如是記候

栄行院殿 釋道哲居士

墓清重ト同ジ

信重嫡子

三州土井城ニテ出生
諸大夫土井豊後守ト本多豊後守廣孝

有之
隠居後越前守改

四歳之時、父信重討死仕、幼少之内

陣場江、者為名代家臣本多左馬之助

人数召連御供仕候、成人之後從

廣忠様御一字被下之

一 権現様於參州御弓矢被為

執候節、本多一統十七騎之内廣孝者

一家之依為本家、旗頭被仰付

御城数無之時分より城主ニ而一手之將ヲ

仕候、依之本多平八郎忠勝ヲ始、末家

之事候間十六騎之本多ハ立葵之

紋可致遠慮、仮令付候而茂左離ハ

廣孝者人ニ而其外者右離付可申旨

権現様 上意之由申伝候得共、近年

者世上一統左離ニ罷成候

一 廣忠様御代三河国中、大方御敵

相成織田信秀或者今川義元江附申

候節、廣孝二心なく御忠節申上三州

和田、佐々木、上野等之御敵と数度

戦、軍功仕候

一 権現様御代、廣孝数度御忠節申上

候ニ付度々 御自筆之

御判物 御書被下置候

本豊参

権現様未 元康様与奉申候御時

右御自筆之御書今以所持仕候

御合戦之刻廣孝無比類高名仕候ニ付

一 永録四(ママ)辛丙年 今川氏眞より吉良

御褒美之

義照ヲ三河国吉良東條ニ被筆置

御書被下候写

候ヲ権現様 御攻被遊候へ共義照

今度合戦御手前高名無比類候

堅く守り防候ニ付向城三ヶ所、被

殊ニ山之手江茂早々御上候つる由

仰付小牧ニ本多豊後守廣孝、粕塚ニ松原

左衛門尉申候、祝着此方より猶重而

三九郎、津之平ニ松平左近忠次被差

可申入候、恐恐謹言

置

十一月一日

岡崎 元康御判

権現様岡崎江御帰城被遊候段

故数度迫合有之候、兼而

権現様広孝江之上意ニ、義照之^昭

家老富永伴五郎さへ討取候ハゞ、此所

御手可入と被思召候由、依之廣孝

其近辺村々之民ニ金銀ヲ遺し伴五郎

出候ハゞ、早々可申来旨手合仕置候所

折節廣孝食給候時分、伴五郎出候由

注進有之、則具足着し馬之上ニ而

上帯しめながら、藤浪縄手へ人数を出し候

得者、城中よりも敵出て防戦中ニ

伴五郎弓ヲ持働之躰、猪之走か如くニ

有之候由申伝候、廣孝多勢の中へ

駈入、自身伴五郎ヲ鎗付則首討取

申候、伴五郎塚と申て今ニ藤浪縄手

塚有之由

此年参州吉良城も拝領之由

外之録ニ有之

権現様 即察被遊候通伴五郎

討死之後、城中勢おとろへ扱ニいたし

城を明渡義照ハ立退申候、軍功として^昭

東條領 貝福 駒場

令領掌畢

永良 木田 吉田

一 彼地誰人之申様雖有之一切不可令

楠木 宮狭間 寺嶋

許容、寺社領迄其方可為計事

津之平 山田

一 無事之儀候共以他地相当程可懸惣前

右之地ヲ被下、其上代々御忠節

彼地方之入組有之由、改次第可有所

之儀御歎被為思召候

務之事

上意之上 御墨付被下候写

一 伴五郎同心衆之中ニ於津之平給分

今度小牧ニ取手ヲ被成候儀祝

取置候之間、彼地余人江出置候間草賀

着申候、為勲功与富永伴五郎

次郎右衛門以跡職相当程可被取候事

跡式并同心衆跡共如書立之永

右代々依有忠節彼地進置上ハ

永不有相違者也、仍如件

永録(ママ)四六月廿七日源元康御判

本多豊後守殿

右御自筆之御判物今以所持仕候

一 永録(ママ)五戊年、三州一向宗一揆起

御譜代之諸士噪動之節も廣孝土井

城ニ罷在其近辺

土呂 羽根 針崎 若松 大草

浦部 八面 佐々木 野寺 桜井

此村々皆御敵ニて、土井之城は其中ニ

挟れ朝夕取合罷在候、弥無二心様

御忠節為申上嫡子彦次郎于時九才

岡崎江人質ニ差上候得者、

権現様甚被遊御満悦、元服被

仰付御一字被下康重と名乗

可申候、廣孝代々無二心御忠節申上

候故聊御疑無之処、幼少之倅

差上候段被遊 御歡候間、

上意ニ而 御召初之御具足

御馬康重ニ被下置、人質ニ不及之旨

上意^ニ而土井江御返被遊候、廣孝

御忠節申上、一揆之徒党無事^ニ調

候由申伝候

右之御具足、今以所持仕候

一 永録六年^(ママ)癸亥年

権現様東三河江被遊

御働候節、廣孝為御先手小坂井

辺江打出合戦仕、首数五十余討取

家来三拾人討死仕候、其節^茂

御自筆之 御書被下候写

一其城之儀、於度々御忠節候、然間

一 国悉破捨候共、其城之儀不可有

別條事

一 於東條領進置候知行、富永伴五郎

跡式^(職)不及申、如先判廿人跡職、何之在

所候共進之候、若味方拝領地之内^ニ

候ハゞ相当程以他之地可進之候、附り

本地之内、永代賣借米錢、今度敵方^ニ

成者借儀為何儀^ニ而忠節又ハ無事

候とも、彼官人^ニ至る迄一切納所なく可

被取事

一 其城籠衆於向後可有異見事

右之條々於末代不有相違者也

依而如件

永録六(ママ)癸亥

十二月七日 藏人 家康御判

本多豊後守殿

右御自筆之御判物、今以所持仕候

一 三州吉良東條領、富永伴五郎取

来候知行所、不残拝領仕候内、為替地

被下之時之

御証文之写

富永伴五郎知行、貝福、駒場

并永良、山田、給之為替地進置

地之事

一 百貫文 下和田一名藪田

一 九拾六貫八百文 善明之郷

一 百五拾七貫九拾六文瀬戸之郷

右之三ヶ所、(たとい)縦無事ニ雖成行替地等

之儀有間敷候、又津ノ平為替地木田

之郷一円付、吉田郷其方知行之外
七拾三貫文之地進之置候、切々御
忠節候条末代不可有相違者也、仍如件

(ママ)
永録六 癸亥

壬十二月 日 家康御書判

本多豊後守殿

参

右御自筆之御判物、今以所持仕候

一 其後、廣孝吉良筋_江手遺仕、彼之

地之様躰伺、言上仕候得者

権現様、小坂井_ニ被成御座刻御返事

として、御自筆御誓言入候
御書被下、彼地_江被為
召御軍談被遊、東三河筋_江被遊
御手遣其御書之写

尚々其方うたかひ申事

御状談拝見申し候、何此地へ御越

神そし無御座候

可有候、談合可申候、其方便早々

御入候由祝着及候、御出待入申候

恐々謹言

八月廿一日 家康御書判

小坂井より
藏人

豊後殿
返事_江

右御自筆之御書今以所持仕候

一 永録七^(ママ)甲子年、今川氏眞より朝比奈肥後守ヲ

三州田原之城ニ被籠置候処、廣孝

梶と申所ニ砦を仕、城ヲ責度々迫合仕候

或時城中より人数を出し候刻悉ク討勝

城際江追詰候得者敵返し合、長谷川

十三郎と名乗、廣孝家来本多甚十郎

と鎧ヲ合、廣孝人数勢ひ掛て敵を

城之内へ追込み附入にいたし外圍輪

攻破り候得者敵こらへず、扱に致し

城を明渡し肥後守立退申候、其御恩

賞として

梶・二崎・白屋・浦之郷・鋪地・新野美

等之津々其上田原之御城共拝領仕

夫より田原ニ在城仕、近辺ヲ納候得者

前澤・矢熊・高松・赤羽根・神戸・

土村其外七百余貫之地ヲ被下候

御證文之写

今度田原梶ノ砦申付候、其恩賞

として進置地之事

一 貳百貫文 田原之郷

一 百五十貫文 梶之郷

一 五十貫文 二崎之郷

一 百貫文 浦之郷

一 七十貫文 鋪地之郷

一 百貫文 新野美之郷
細二帖

一 田原之城准之以調略雖取置之

宮代之事、其方江可申付并座王山

進置候事

一 進置之地之内一円諸役浮所務

為其方計之事

右條々永不可有相違、若此内

於不足者他之地を以可進置之

假令雖有為何義彼地者末代

可為本地、田原惣地檢雖有之於

進置之地者可免除者也、仍如件

永録七(ママ)甲子

六月 日 藏人 家康御書判

本多豊後守殿

右御自筆之御證文今以所持仕候

一 廣孝三州田原在城之時、拝領地之

一 永録八^(ママ)乙丑年

外、人足遣可申旨

権現様三州寺部之城被遊

御自筆之御書被下候写

御攻候時、鈴木日向守、城ヲ捨立退申候

酒井将監、岡崎ヲ去て上野之城ニ

田原あかばねをきり候て

被籠候、依之酒井左衛門尉忠次、本多

下郷人足可有御使候、若此上罷

豊後守廣孝被遣候得^者、将監城ヲ

不出候ハゞ成敗可有候、恐々謹言

捨駿州^江参ル

六月廿五日 家康御書判

一 永録十二^(ママ)己巳年

本多豊後守殿 参

権現様遠州掛川城^江

右 御自筆之御書今以所持仕候

御向被遊候節、同国久野之城に久野

淡路守、同彈正同采女罷在謀叛ヲ

一 同年、今川氏眞遠州掛川籠城之

起今川氏眞江内通仕候旨久野三郎左衛門

節、廣孝天王山口より攻寄相戦、家来

宗能言上仕候得者廣孝ヲ被遣、淡路守

本多左馬之助・吉見孫八郎与申者敵ト

ヲ誅し彈正采女ヲ御追放被遊候

鎗ヲ合其上家中江首八ツ討取、畔柳

此事懸川之城内ニ而未知、兵を出し

又市与申者討死仕候

権現様ニ可奉襲手立仕候処ニ其旨

一 元龜元庚午年六月、江州姉川御合戦

兼而御察被遊為伏兵、大須賀五郎左衛門

之節廣孝御旗本之先ヲ仕候、然ル処

康高・大久保七郎右衛門忠世・松平左近眞乘・

浅井か兵と合戦始り御味方之先手

水野宗兵衛忠重・本多豊後守廣孝ヲ

悉く討負候而乱る時

被遣伏ヲ発して敵と戦へ得勝利候

権現様、松平左近眞乘・本多豊後守

廣孝ニ御向之御旗本之備ヲ崩し

掛り候得と被遊

御下知候、則廣孝鎧を取て真先ニ

立敵陣へ突懸り候得者惣勢も続て

懸り即時ニ敵を追崩

御勝利被成候、此時廣孝鎧ニ而突レ

候得共具足当り肌ハ破り不申候、家来

長坂治郎太郎・尾崎彦五郎と申者討死

仕候

一 同年信長と浅倉・浅井と江州滋賀

におゐて戦陣之時

権現様為御名代石川日向守家来

本多豊後守廣孝兩人信長江御加勢

被遣候、信長より御使として木下藤吉郎

秀吉ヲ濃州洲之俣迄被下、志賀(ママ)

表ハ事済候得共、兩人加勢ニ給候儀

西国迄之聞江ニ而候間彼地迄参り

候得と被仰下候

一元龜三壬申年十二月、味方ヶ原

御合戦後レ口之時廣孝返し合

御味方助嫡子彦次郎康重も自
身高名仕、家来高部屋架之助与
申者首ヲ取申候

一 天正元癸酉年五月、武田勢遠州表へ

働候節、本多豊後守廣孝・大須賀五郎左衛門
康高・本多作左衛門重次・本多平八郎忠勝・

榊原小平太康政・菅沼小大膳ヲ被差向候

武田方二八一条・山縣・穴山等大軍を

率し遠州森と申処にて合戦仕候

甲州勢敗軍、御味方得勝利、早々引取申候

時、廣孝（しんが）殿り仕候所、甲州勢取て
返し慕申候、廣孝返し合相戦首
数多討取残ル敵ヲ追払静ニ引取申候
此時家来世式人討死仕候

一 同年奥平美作守御味方ニ被遊候儀

廣孝と御内談ニ而則廣孝御使仕

美作守嫡男九八郎ヲ

権現様 御聲ニ被遊候、九八郎妹ヲ

廣孝二男藤六郎重純妻ニ仕、美作守

御味方ニ罷成候

一天正三乙亥年五月、三州長篠

御合戦之時、武田勝頼滝川ヲ涉り陳(陣)ヲ取ハ

権現様、酒井左衛門尉忠次、本多豊後守廣孝

本多平八郎忠勝に御向被遊

上意ニ者兼而何茂相謀候通敵川ヲ

涉り陳取候者、味方勝利無疑と(陣)

御喜悅ニ而弥御軍談被遊、廿日暮合ニ

酒井左衛門尉為御使、信長之陳へ被遣

今夜武田之陣之後ヲ廻り、鳶巢山

敵之先手之陣屋ヲ焼立候ハ敵噪き

可申処ヲ長篠之城よりも人数を出シ

さし挟ミ相戦候ハゞ、勝利可為旨被

仰遣候得者、信長大ニ喜悅同心、則陳ヲ

廻し権現様より酒井左衛門尉組之人々

為前將、本多豊後守被遣、夜韻ニ両敵川ヲ涉り

山を越て鳶巢山ニ登り、甲州勢の

陣屋ヲ焼立関ヲ発候時、奥平九八郎

信昌も兼而廣孝と内通之通長

篠之城より突て出、敵ヲ差挟甲州勢

を数多討取、悉く御勝利ニ罷成候

此時廣孝嫡男彦次郎康重、御味方
之先懸仕、鳶巢山壺番乗仕候、長篠
御合戦已前迄ハ

権現様御分国ヲ敵ニ不被執様ニ被

思召候処、長篠悉く御勝利之後

天下之御心掛厚く被為成、忠次・廣孝・

忠勝三人之武略剛強度々

御褒美被遊候由申伝候

一 天正三乙亥年、遠州小山江御働之時

小山之城ニおゐて

権現様御陳ヲ御取被遊候、其間ニ

池有之、小山之城より物見ニ弐騎乗出し

右之池半迄乗込ミ取て返、池ヲ廻り

御出陳間近く物見仕候節

権現様被遊上覧如何ニ物見なれ

ハとて無憚此陳間近く乗候事無

礼也、豊後守廣孝ハ無きか、あの跡を

取切二騎之武士討取れ、と

御下知被遊、則廣孝罷出右の跡を

取切候、其勢ひヲ見附候て弐騎之物見

最前乘込候池べりを真一文字ニ乗

渡り城中へ早々逃入候由申伝候

一 天正四丙子年、遠州乾之城

御攻被遊候時、城主天野宮内右衛門景貫

城ヲ出て防戦、御味方之先方利ヲ失へ

候処、本多豊後守廣孝、石川伯嗜^(著)守康^{ヤス}

正、大久保七郎右衛門忠世、同八右衛門忠佐

平岩七之助親由、榊原小平太康政

水野惣兵衛忠勝、鳥居彦右衛門元忠

松平左近眞乗突懸り粉骨ヲ尽シ

戦候故、天野宮内右衛門討負降人ト成

城ヲ明渡申候

一 権現様遠州 御治メ被遊候時分

久野之城ニ廣孝罷在、在城仕手遣仕候

一 天正五丁丑年冬、遠州之内川尻、榛原、

樽木、飯田、小刈、原河彼是二千

貫ノ領地拝領仕、三川国之本地ハ嫡子

彦次郎康重ニ譲り、廣孝隠居仕候へ共

御陳場へ^者毎度被召御供仕候

右久野之城領分、次男藤六郎重純

相續之筈被 仰付候処、其後御陣場

ニ而深手負相果悴藤六郎早世ニ而

断絶仕候

一 天正十_壬午年、信州乙骨へ廣孝

御供仕、小田原勢古府中へ廻ル間敷

ための押ニ本多豊後守廣孝、榊原小平太

康政、大須賀五左衛門康高三頭若御子筋ニ

陣取、敵と度々迫合ニ首数多討取申候

然処小田原之多勢ニ慕れ候得共堅固ニ

引取申候、此時廣孝家来本多兵助と申

者無比類働仕候、於其場従

権現様御腰物拝領仕候

一 天正十二_甲申年、尾州長久手御合戦之時

廣孝御供仕、蟹江之城御攻被遊候節

自分小幡ニ砦之御番仕候

一 天正十五_丁亥年、豊後守秀吉公筑紫

御陳之時

権現様為御使 廣孝西国へ被遣砦之

城攻之時戦功有之、秀吉公御褒美

被成金のし付金罽之大脇差ヲ被下

御返答承り罷歸候時、黄金十枚羊之

康重ニ被下之、越前守廣高者遠州

皮羽織被下之候

久野之御代地壹万貳千五百廿七石五斗余隱居

右兩品之内羊之皮羽織ハ上州白井

為料格別ニ被下置父子共在城仕候

ニ而燒失仕候、大脇差ハ今以所持仕候

一慶長元丙申年三月廿七日、上州於

一 天正十八庚寅年、小田原御陳之時分も

白井廣孝病死年七十一

嫡子康重ニ家督譲り候得共父子共御供

全性院殿玉岸道禁居士葬上州白井

一世之内数度戦疵ヲ受ル

跡廿六ヶ所有之源空寺

仕候

一 天正十九辛卯年

一 権現様三州遠州御領之節

権現様関八州江御移被遊候時

松平甚太郎

二月十五日上州白井之城領貳万石豊後守

本多豊後守

榊原式部少輔

同一侯之城

大久保七郎右衛門

本多中務少輔

鳥居彦右衛門

酒井左衛門尉忠次組 東三河

右同御時代城主

松平右京

三州吉良之城 酒井雅樂頭

松平内膳

同 吉田之城 酒井左衛門尉

松平源七郎

同 田原之城 本多豊後守

松平又八

遠州懸川之城 石川日向守

松平玄番

同 諏訪原之城 松平周防守

松平弥三郎

同 久野之城 久野三郎左衛門

松平丹波

設樂甚三郎

奥平九八郎

牧野新次郎

鶉殿八郎三郎

西郷新太郎

松平又七

石川伯嗜(善)守康政組(教正力)西参河

松平源次郎

松平勘四郎

松平宮内少輔

松平三藏

本多縫殿

嶋田平藏

平石七之助

酒井与四郎

内藤喜市

鈴木越中

酒井与七郎

於三州土井 本多彦次郎康重
出生

於陣場自身首討取申候

後豊後守改

一元龜元年、江州姉川御合戦之時

(永禄六年九月)
永禄五年亥年 母松平甚太郎義春娘
一向宗一揆之節

父廣孝陳所ニ罷在、自身首討取手

一 永禄五年九歳之時、父廣孝方より

疵二ヶ所負申候

岡崎 江人質ニ差上候節

一元龜三年、遠州味方ヶ原御合戦

権現様 御悦ニ被 思召於

後レ口之処、父廣孝と同返シ合自身敵

豊後被仰付
御前御一字被下、其上

の首討取申候

御召初御具足并御馬被下置候

一天正元年五月、武田勢遠州表江働

一 永禄十二年(マ)今川氏眞、遠州掛川

候時も、父廣孝ト同く罷越合戦仕候

籠城之時十六歳ニ而初陣仕、康重

一天正三年五月、長篠御合戦之時、父

廣孝与同く鳶巢山に向首数

首尾能討取申候、此時康重手疵

討取、其上康重御味方之先懸仕

二ヶ所負申候所左之股ニ当候鉄砲之玉

城之一番乗仕候時、敵鉄砲ヲ伏打仕

ひしけ候て不拔、相果候迄股之中ニ

候、康重左股ニ当り候得共終ニ城

有之候由申伝候

一番乗仕候、其刻敵三人康重ヲ目懸

一 同年遠州小山江

突懸り候所、老人ヲ鎗付老人ヲ者家来

権現様御働之時も御供仕候

山下庄右衛門与申者討取申候、今老人者

一 天正四年、遠州乾之城御攻被遊候

敵鎗捨康重ニ組懸り候、康重最前

時も、父廣孝と同く御供仕合戦仕候

之敵ヲ突捨則組候処、康重危ク

一 天正五年、父廣孝遠州久能之城并

有之時分、山下庄右衛門走り付三人共ニ

於彼地二千貫文之領地拝領仕候、三

河之本地不殘康重相續仕候田原在城□□候

一天正九年

一天正六年之夏、甲州勢遠州表江

権現様遠州高天神之城江御向ひ

罷出候刻、大久保七郎右衛門忠世・本多豊後守

被遊候刻、康重御供仕城ヲ攻勲功ヲ励

康重兩人江被仰付久津部江押ニ参ル

敵ノ首二十一討取申候

遠州諏訪原小山之城御攻被遊候時も

一天正十年、乙骨江も康重父と同

御供仕軍功仕候、鉄砲洞ニ当リ候得共

御供仕、若御子筋江陣取敵と度々

無毒(善方)由申伝候

之せり合ニ首数討取申候、小田原勢ニ

一天正八年五月、駿河国田中御働之刻

したわれ候得共堅固ニ引取申候、其後

康重御供仕城ヲ攻申候、此時家来

権現様甲府ニ取手を被遊候刻

森惣九郎与申者討死仕候

諸跡替之御番仕候

一 権現様信州江御手遣被遊候時分

諏訪小太郎方江康重娘ヲ遣し

聳ニ仕候ニ付而御味方ニ罷成候

一天正十二年三月、尾州長久手御合戦

之時、秀吉公家臣森武蔵守長一

羽黒与申処江出て陣取申候処

権現様酒井左衛門尉忠次・奥平美作守

信昌・松平紀伊守家信・松平主殿頭家忠・

本多豊後守康重ヲ被遣、長一与合戦

之刻、御味方之諸勢長一ニ切立られ

大きに敗軍之時、長一勝に乗て

備を乱して追欠(ママ)時分、康重ハ兼て

備ヲ不乱罷在、崩懸御味方之勢ヲ押分

一足も不引相戦候ニ付、長一備ヲ立兼候

時分、康重磨(さしずばた)ヲ振て懸れくと下知

致候得者味方追々取て返し候

康重真先懸敵之中ニ懸入候、元来

長一備ヲ乱候事故、一たまりもさゝ

えず敗軍仕、悉く御勝利ニ成

申候、康重手ニ而武蔵守ヲ討取

申候、此時

権現様甚御機嫌ニ而

御感状被下候処、於上州白井焼失仕候

一 同年四月、長久手ニ而又御合戦之時

康重御先手仕、敵方三好孫七郎

秀次・堀久太郎秀正与相戦、康重

三好と迫合勇功ヲ励し、自身太刀打仕

候所、刀之目釘折組討仕、首取申候

此日康重手疵七ヶ所負申候、家来

大久保久右衛門・平井善五郎・長坂外記与

申者ヲ初メ彼是三十六人討死仕候

権現様より御感状被下候、於上州

白井焼失仕候

一 同年、蟹江之城御攻被遊候時、長久手

ニ而之手疵いまた平癒不仕候得共

人数召連御供仕候

一 天正十三年、石川伯嗜(善)守上方江立退

候刻、三州之城主何れも人質ヲ進上

仕候ニ付、康重も次男次郎八紀貞ヲ

進上申候時

権現様 上意ニ康重者先祖代々

忠孝仕、終無別心候故、毛頭御疑無之候

間、不及人質

御心易被思召候旨 上意ニて

祖父廣孝知行所ニ被差置候

一天正十八年、小田原陣之時、康重

天王口仕寄仕、城ヲ攻申候、此時康重

笹土手ニ而矢疵一ヶ所負申候、其節

敵壺人生捕、則言上仕候得者秀吉公

被聞召、其仕寄場ニ機ニあげ候得と

御下知也、康重家人浅井助兵衛・

青木助藏と申者右之機ヲかつき城

間近く堀端ニ機ヲ立候得者、城中より

弓・鉄砲無透間打懸候得共、首尾能

立置罷帰申候

一同年、関東 御入国之後、上州白井

城并領地弐万石康重ニ被下在城

仕候

一天正十九年、奥州御陣之時

御朱印被下、稗^(標)拔迄罷越候、右

御朱印之写

急度申遣候、依而奥州

御出馬儀之条、各用意

不可有由断候也

十二月四日 御朱印

本多彦次郎とのへ

右之通今以所持仕候

一文録元(マ)壬辰年、高麗陳(マ)之時

権現様、肥前国名護屋被成御座候刻

康重関東御留主被差置候

一 慶長五庚子年、上杉景勝御退治として

権現様奥州御進発之時、康重方へ

御黒印被下、野洲小山迄御供仕候

然ル処、石田治部少輔三成謀叛ニ付

台徳院様小山より江戸表江

御帰城被遊、其後信州上田江

御出馬被遊候時、康重御供仕真田

安房守居城攻申候、此処御引払上方江

御発向之時、康重ニ殿り被

仰付相勤申候

一慶長六辛巳年春、上州白井城より

三州岡崎之御城江取替被

仰付、五万石之領地并兵糧五千石拝領

仕候、其節本多佐渡守正信奉書

之写

猶以御城・御知行・御兵糧被下御受取

能々可被仰付候、以上

急度啓上仕候、仍而三州岡崎之

御城ニ五万石之御知行相添被進候間

御受取御仕置等可被仰付候、殊

御兵糧五千石被進候、伊那備前守殿

手代衆可被罷在候間、夫より御城茂

御兵糧も御請取可被成候、若又備前

守殿手代衆杯ニ不存杯と被申候ハ、

備前守殿御入候処江被遣候而

如書付御請取可被成候、恐惶謹言

本多佐渡守

二月二日 正信判

本多豊後守様

人々御中

右奉書今以所持仕候

其後岡崎之城江

権現様初而被為 成候時、康重

御側近く被為 召、代々無二心御忠節

尽候段々被

仰立、依之 御弓立所ヲ被

下置候旨、 上意候

右之節、諸将江御加恩之面々

上野国箕輪城十二万石
近江国佐和山城十八万石
被成下 井伊兵部少輔直政

上総国大多喜城七万石
伊賀国桑名城十万石
被成下 本多中務太輔忠勝

上総大多喜城領
五万石 本多内記忠朝

上総国鳴渡城二万石より
美濃国大垣城領
五万石被成下 石川長門守康道(ママ)

上州白井城老万石より
三河国岡崎城領五万石
被成下 本多豊後守康重

武州川越城老万石より
上州厩橋城領三万三千石ニ
被成下 酒井河内守重忠

上州布川五千石より
常州土浦城領三万
五千石被成下 後羽州上山之
城主松平山城守 松平勘四郎信一後伊豆守改

武州八幡山老万石より
三州吉田城領三万石
被成下 松平与次郎家清後玄番頭改

上州高崎二万石より
濃州加納城江被遣候
下総国小南三千石より 奥平美作守信昌

遠州懸川城領三万石
被成下

松平三郎四郎定勝
後隱岐守改

上州久留里城三万石より
遠州横須賀城被遣

松平出羽守忠政
是大須賀五郎右衛門

武州騎西二万石より
上州笠間城三万石
被成下

松平周防守康重

三州吉良江被遣

松平縫殿助康俊
今主膳正祖也

武州松山二万石より
遠州浜松城領五万石
被成下

松平左馬允忠(親カ)
松平遠江守祖也 □

上総国二万石より
駿州沼津へ被遣

大久保治右衛門忠佐

豆州葦山城より
駿州府中城江
被遣

内藤三左衛門信成
今奥州岩城之城主備後守祖也

武州川越五千石より
上州難波老万石ニ
被成下

酒井雅樂頭忠世

中部五千石より
上総・下総両国之内老万
五千石被成下

青山常陸助忠成
丹波龜山城主伯耆守祖也

下総国小見川より三州
深溝之城領老万石被成下

松平又八郎忠利

駿州興国寺領老万石
被成下

天野三郎兵衛康景

尾州小川城領老万石

上州安中城主信濃守祖也
水野三左衛門 □ 長
後備後守改

尾州黒田城三万三千石より
勢州神戸五万石被成下

一柳監物直盛
伊那小松領主隼人祖也

肥前国佐賀城四万石
旧領合十二万石被成下

寺沢志摩守廣高

伊予国壘万七千石より
豊後国江本高三而

木嶋右衛門康親

江州二千石御加増
旧領合七千石被成下

永井右近太夫直勝

上総勝浦ニ於二千石
御加増旧領合五千石

植村土佐守春忠

一 右之以後三州土井郷、先祖代々

本領ニ付奉願候節、伊奈熊蔵迄以

飛札申上候返札之写

猶以御知行之事、御披露申上候得者相濟

候間、如前々御所務可被成候、御城御普請

御苦身共己申尽候、以上

御大儀ニ而御飛札被下候、其元様子

承度折節、御懇ニ預忝候、過分之

至ニ候、然者三州土井郷御本地之由

申上候処ニ

殿様茂御尤之由被仰出候、如前々

出見共御所務可被成候、御披露

之時、本佐御懇ニ御取合ニ而候つる間

御札被仰候旨尤候、本佐御手形ヲ

取二左衛門殿可被遣候、我等も二三日

之内御陣場江可参候間、御報可申上候

恐惶謹言

五月十九日

伊熊書判

白之嶋

本彦次郎様
御報

右之返状、今以所持仕候、年号ハ
相知不申候

一 慶長八癸卯年、

権現様 將軍 宣下 御参

内之時、騎馬之諸大夫十騎之内

康重、左四番ニ乗申候

一 慶長十六辛亥年三月、康重、於

岡崎之城相煩候時分、從

台徳院様為 御尋上使松平助十郎

岡崎江被下候、其節之

御内書、以今所持仕候

右之病氣、養生不叶、三月廿二日

病死、年五十八

鳳翔院殿陽山道雪居士遠州横須賀

撰要寺墓有

御一せ之内猶御合戦ニ御疵廿八ヶ所有御坐候由

康重嫡男

本多彦次郎康純己トシ

於三州田原出生
慶長六年諸大夫被仰付候

後伊勢守其後
豊後守改

母石川日向守家盛娘

一 天正十九年、從

權現様 御一字并一文字之

御腰物拝領仕候

一 慶長十年、

台徳院様 將軍 宣下御参内

之時、騎馬之諸大夫之内左四番ニ乗申候

一 慶長十六年、父康重遺跡ヲ繼

三州岡崎ニ在城仕候

一 慶長十九 甲寅年冬、大阪御陳(ママ)

之節、康純 御供仕、備前嶋ニ仕寄仕、川

中芦原ニ陳取申候、城内より打出し候(ママ)

鉄砲之玉、康純寄場江多来候ニ付、其段

言上仕候得者、左程近く候ハゞ、此方よりも

鉄砲打可然旨、上意ニて大筒十挺

被遣打懸申候、其後

權現様御先備、危く被

思召候ニ付、天王寺表江被

招呼、御旗本之先ニ陳取申候、然処(ママ)

扱ニ相成御帰陳被遊候刻、御跡ニ被(ママ)

差、大阪之城門ヲ守、惣堀ヲ埋させ(置脱)

申候

一元和元乙卯年五月、大阪御陳再乱(ママ)

之時、康純御供仕、二番乗仕候、松平筑前守

陳(ママ)之右之方ニ備ヲ立、合戦仕、首数式百十

討取申候、此日康純、城之大手千貫櫓

下迄乗込申候所、敵之鉄砲ニ而内冑之

眉間ニ当候得共、其玉ひしけ内張ニ而

止り、恙無御座候故直ニ乗込申候、此時

家来長坂勘三郎・河合半右衛門討死

中嶋半兵衛・石黒平内右衛門・多田彦兵衛・

日比野左五右衛門・堀猪之助・柴田半右衛門・

齋藤久右衛門・中嶋庄右衛門・土屋小兵衛

与申者手負、足軽少々討死仕候

右鉄砲之玉有之冑、今以所持仕候

一台徳院様より御茶壺拝領仕、今以

所持仕候

一台徳院様御代、度々御自筆之御書

御判物被下置、今以所持仕候、御馬も

度々拝領仕候

一元和九癸亥年、

大猷院様 將軍 宣下御参

内之時、騎馬之諸大夫十四騎之内、康純

右四番ニ乗申候

一 同年之秋、康純、於三州岡崎相煩候節

從 台徳院様御内書被下、其上

療治可仕旨、 上意ニて岡本玄治、岡崎

江被遣候処、康純九月廿五日病死仕候

ニ付、玄治途中より罷帰候、康純年

四十五

語琳院殿雄山道栄居士

墓ハ 康重ト同シ

御内書之写

所勞之由、無心元思食候、無油断

養生肝要候、猶土井大炊頭可申候也

九月廿一日 御墨印

本多豊後守殿

右御内書、今以所持仕候

康純嫡男^巳

本多伊勢守忠利

於三州岡崎出生
元和元年六月
初出羽後
諸大夫被仰付
伊勢守

権現様
御姪也
母松平玄蕃頭家清娘

一 父康純病死之後、

井上主計頭

台徳院様達御耳不大形被為

正就書判

惜御愁腸之旨、為御悔忠利方江以宿継

土井大炊頭

利勝書判

奉書被下置候 写

本多伊勢守殿

急度申入候、豊後守殿仕合達

右之奉書、今以所持仕候

御耳不大形被為惜御愁腸之

一 慶長十八年七月、從

御事ニ御座候、誠是悲ヲ申様無之より

台徳院様 御一字并雲次之

御心底之程察入候、恐々謹言

御腰物拝領仕候、今以所持仕候

永井信濃守

一 慶長十九年、大阪冬御陳(ママ)之刻、忠利

十月七日

尚政書判

幼少ニ付、江戸ニ罷在候

岡崎ニ在城仕候

一元和元年夏、大阪再乱之節、忠利

一寛永三_{丙寅}年四月十五日、松平遠江守・

御供仕、父康純_(巳)於陳場_(ママ)自身首討取

本多伊勢守兩人以來、諸大夫之座上ニ

則 御本陳_(ママ)江持参仕候処

可罷出之旨被仰出、土井大炊頭利勝

権現様、忠利年ヲ御尋被遊候時

上意申渡、夫より代々遠江守同様ニ

十六歳と申上候得_者、祖父康重、遠州

万端御規式之節、諸大夫之座上仕候

掛川城責之時、十六歳ニ而_(ママ)初陳致し

一同十一_{甲戌}年、

候節、致高名候祖父ニあやかり候と

大猷院様 御上洛之時、岡崎之城_江

被遊御褒美候

被為 成御懇之

一元和九_亥年、父康純遺跡ヲ継、三州

上意之上、御手づから景秀之

御腰物被下、於三河国五千石御加増

拝領仕候

右之御腰物御書、今以所持仕候

一 大猷院様御代、忠利岡崎江御暇

被下置候、度々御馬拝領仕候

一 同御代、江府御本丸大奥御普請

御手伝被仰付、相勤申候

一 正保二年二月十日、於江戸忠利

病死、年四十六

仁光院殿勇宣道智居士

墓ハ

康純同

卷之壺者元文二丁巳年八月

十七日入上覧候扣也、本書ハ

助芳公御代出来有之帳ヲ

以奥平七郎右衛門政照依

命、諸事之書物道具等引合

相糺改正之、入

上覧候、次第追加ニ記之

忠利嫡男

本多越前守利長

母井上主計頭正就娘

一 正保二年、父忠利遺跡ヲ繼申候

幼少ニ付三州岡崎所替被

仰付、遠州横須賀之城拝領仕候

本高五万六千五百石余之内六十石与

五万石余 本多石見

後越前守改

六十石

四千五百石

本多内膳

後彦八郎改

石見弟母ノ姓ニ改

二千石

井上式部

後兵庫頭改

右之通本領家督配分仕候

一 同年利長十一歳之時、

大猷院様御代被為 召家柄之筋

目段々被 仰立、幼少ニ候得共諸大夫

被仰付、越前守ニ改申候、十一歳ニ而

諸大夫被 仰付候義(儀)、御例無之由

御老中被申聞候

一 正保三年 戌八月、駿州久能山

御宮御造營之節、御手伝被

被下置、相渡候迄勤番仕候

仰付、相勤申候

一 寛文元年丑八月より翌年八月迄

一 正保五子年二月、駿州田中所替之

大阪加番被 仰付、相勤申候

時分、請取在番被 仰付、家来差出シ

一 同年十一月、遠州横須賀城米二千石

相勤申候

御預ケ被遊候

一 慶安四年卯六月、三州鳳来寺御造

一 寛文七年未八月より翌年八月迄大阪

營之時、御手伝被 仰付、相勤申候

加番被仰付、相勤申候

一 万治元年戊閏十二月、遠州掛川城主

一 延宝六年午年六月、遠州浜松之城主

北条出羽守病死仕断絶之節、受取在番

所替之節、請取在番被仰付、相勤申候

被 仰付、翌年掛川井伊兵部少輔直好

一 厳有院様御代、度々以

上使御鷹之鷹・雲雀拝領仕候

辰七月廿九日被為

一 天和二年^戊二月廿二日、大久保加賀守宅^江

召、願之通養子被 仰付候

被為招呼、第一其身不行跡、其上

一 元祿五年^申十二月十六日、於江戸

家中并領地之仕置不宣候^ニ付

利長病死年五十八

横須賀之城領被

廣徳院殿仁譽嶺山道勇大居士

召上、対先祖新知壺万石被下之旨

葬武州江戸麻布教善寺

被 仰付、出羽国村山郡之内拝領仕候

一 越前守悴彦左衛門早世仕、其後実子

無御座候^ニ付、同姓彦八郎次男新右衛門

儀養子仕度旨奉願候処、貞享五年

